聚星堂雪 幷敍

元祐六年十一月一日，禱雨張龍公，得小雪，與客會飲聚星堂。忽憶歐陽文忠公作守時，雪中約客賦詩，禁體物語，於艱難中特出奇麗。爾來四十餘年，莫有繼者。僕以老門生繼公後，雖不足追配先生，而賓客之美，殆不減當時，公之二子，又適在郡，故輒舉前令，各賦一篇。

1 窗前暗響鳴枯葉　窓前 暗に響いて 枯葉を鳴らす
2 龍公試手行初雪　竜公 手を試みて 初雪を行る
3 映空先集疑有無　空に映じて 先ず集れるは 有無を疑い
4 作態斜飛正愁絶　態を作して 斜めに飛べば 正に愁絶す
5 衆賓起舞風竹亂　衆賓 起って舞えば 風竹は乱れ
6 老守先醉霜松折　老守 先ず酔うて霜松の折るるがごとし
7 恨無翠袖點橫斜　恨むらくは 翠袖の横斜に点ずる無きことを
8 祇有微燈照明滅　祇だ 微灯の照らして明滅する有るのみ
9 歸來尚喜更鼓永　帰来 尚お喜ぶ 更鼓の永きを
10 晨起不待鈴索掣　晨起して 鈴索の掣くを待たず
11 未嫌長夜作衣稜　未だ嫌わず 長夜の衣稜を作せることを
12 卻怕初陽生眼纈　卻って怕る 初陽の眼纈を生ずることを
13 欲浮大白追餘賞　大白を浮べて 余賞を追わんと欲すれば
14 幸有回飆驚落屑　幸いに 回飆の落屑を驚かす有り
15 模糊檜頂獨多時　桧頂に模糊たるは 独り多時なり
16 歷亂瓦溝裁一瞥　瓦溝に歴乱たるは 裁かに一瞥のみ
17 汝南先賢有故事　汝南の先賢 故事有り
18 醉翁詩話誰續說　酔翁の詩話 誰か続説せん
19 當時號令君聽取　当時の号令を 君 聴取せよ
20 白戰不許持寸鐵　「白戦するに寸鉄を持するを許さず」と

聚星堂雪　并敍

元祐六年十一月一日、禱雨張龍公、得小雪、與客會飲聚星堂、忽憶歐陽文忠公作守時、雪中約客賦詩、禁體物語、於艱難中、特出奇麗、爾來四十餘年、莫有繼者、僕以老門生繼公後、雖不足追配先生、而賓客之美、殆不減當時、公之二子、又適在郡、故輒舉前令、各賦一篇

聚星堂の雪　并びに叙

元祐六年十一月一日、雨を張竜公に禱りて、小雪を得たり。客と聚星堂に会飲して、忽ち欧陽文忠公の守と作りし時、雪中に客と約して詩を賦し、体物の語を禁じ、艱難の中に於て、特に奇麗を出したることを憶う。爾来　四十余年、継ぐ者の有ること莫し。僕　老門生を以って公の後を継ぐ。先生に追配するに足らずと雖も、而も賓客の美は、殆ど当時に減ぜず。公の二子は、又た適に郡に在り。故に輒て前令を挙げて、各おの一篇を賦せしむ。

○元祐六年(一〇九一)の作。この年二月、蘇軾は翰林学士にふたたび任ぜられ、堅く辞したが許されず、五月、都へ着いた。反対党との争いに疲れていたかれは地方への転出を望み、八月、潁州(安徽省阜陽県)の知事となり、その月、着任した。この詩は潁州での作。○聚星堂　この堂は欧陽修がこの州の知事であったとき建てたもので、聚星の名は後漢の陳寔(一〇四―一八六)の故事にちなんでつけられた。陳寔は潁川(すなわち潁州)の人であって、同郷の荀氏の八竜とよばれる賢人たちと会合したとき、太史(天文方、占星術をもって皇帝に奉仕する)が、ここに「徳星が聚まった」と奏上したという(「世説新語」徳行篇の注に引く「続晉陽秋」)。○張竜公　竜神の名。唐初、景竜年間(七〇七―七〇九)に宣城県(安徽省)の県令であった張路斯はこの県の人で、竜の化身であるといわれ、別の竜と戦って合肥(安徽省)の西山で死し、そこを竜穴山という。その廟は焦氏台という処にあり、行祠(お旅所)が潁州の西湖にあった。やしろに竜の骨という物が蔵せられ、これを持ち出すと雨が降ると伝えられていた。この元祐六年は旱がひどかったので、蘇軾はこのやしろに雨乞いをさせたのである。○欧陽文忠公　文忠は欧陽修(一〇〇七―一〇七二)のおくりな。○作守時　欧陽修が潁州の知事であったのは、皇祐元年(一〇四九)である。○約客賦詩　集まった客人たちに詩を作らせたが、一つの条件をもち出した。約は条件をつけること。○禁体物語　体物とは物象を描写すること。晉の陸機の「文の賦」に見えることば。ここでは、ありふれた形容の語を体物の語といった。欧陽修自作の詩の序によると、「玉・月・梨・梅・練・絮・白・舞・鵝・鶴・銀などの字は、請う用うること勿れ」とあり(六一居士集　外集巻十、「雪」)、また蘇軾は早く嘉祐四年(一〇五九)「江上　雪に値う」詩を作ったが、その題の中で「欧陽の体に効う。限るに塩・玉・鶴・鷺・絮・蝶・飛・舞の類を以って比と為さず。仍に皓・白・潔・素等の字をも使わず」と言う(合注巻一)。○艱難　路を行きなやむこと。ここは、条件がきびしいから、詩を作るのがむずかしいことをさす。○奇麗　異常な美しさ。○莫有継者　継とは(欧陽修の)あとを追おうとすることをいう。莫有は、ひとりもなかった意。○老門生　門生は門人と同じこと。蘇軾が文官試験をうけた時の監督官は欧陽修であり、かれを蘇軾は師とした。○継公後　公も欧陽修をさす。同じ土地の知事となったから、継という。○追配先生　配は配偶というときのように、一対となること、相手とならぶだけのねうちがあること。追は欧陽修の死後だから、かく言う。○賓客之美　美はここでは容貌よりもむしろ資質のすぐれていることをいう。○殆　おそらく。○不減当時　減は劣ること。当時は欧陽修の時。○公之二子　欧陽修の男子四人のうち年長の二人は早く死んで、三男の棐(字は叔弼)と四男の辯(字は季默)とだけが生存していた。○又適在郡　欧陽修は晩年にこの潁州に家をかまえ、家族たちも長くここに住んだ。適はちょうどその時の義。たまたまとよんでもよい。○輒挙前令　輒は、ここでは、ほしいままに、他人のそしりを顧みずの義。前令は前の命令すなわち欧陽修が出した禁約(禁止条項)をいう。挙は提示の義。

元祐六年十一月一日、私は張竜公の神に雨乞いをさせたところ、すこし雪が降ったので、聚星堂で客を集めて酒宴をもよおした。ふと思い出したのは、欧陽修先生がここの知事であられたころ、雪の日に、集まった人々に詩を作らせたが、一つの条件を出した。それは、常套的な形容の字を使わないこと、というのであった。これはむずかしい話だったが、それによって異常な美しさがえられた。それから四十年あまりになる。その前例をふたたび試みようとするものはなかった。私は老いたが、先生の門人として、この地で先生の後任となったものである。とても先生と肩をならべるだけのねうちのあるものではないけれど、ここに迎える客人のすばらしさは、おそらくあのころに劣りはしまい。そのうえ、先生の令息二人も、ちょうどこの処にいらっしゃる。だから、おくめんもなく昔の禁約を示して、ひとごとに一首の詩を作るようにさせたのである。

窗前暗響鳴枯葉
龍公試手行初雪
映空先集疑有無
作態斜飛正愁絶
衆賓起舞風竹亂
老守先醉霜松折
恨無翠袖點横斜
祇有微燈照明滅

窓前　暗に響いて　枯葉を鳴らす
竜公　手を試みて　初雪を行る
空に映じて　先ず集れるは　有無を疑い
態を作して　斜めに飛べば　正に愁絶す
衆賓　起って舞えば　風竹は乱れ
老守　先ず酔うて　霜松の折るるがごとし
恨むらくは　翠袖の横斜に点ずる無きことを
祇だ　微灯の照して明滅する有るのみ

○暗響　誰も気づかぬくらいかすかにひびく。○試手　こてしらべ。○行初雪　初雪は文字どおり(今年の)初雪と解してよい。また、竜神がふらせる第一回の雪と解することもできる。行は巡行の意と関連があり、官吏がその管轄地域内で職務を執行すること。雨や雪は竜神の職務だから、かく言う。○映空　映は向うにはっきり見えること。空は天空。○先集　雪がふる前に空にそのけはいがすること。「詩経」小雅の頍弁篇に、「彼の雪を雨らすが如し、先ず集れるは維れ霰なり」とある。○疑有無　まだ有るのか無いのかも疑わしいほどだった。○作態　態は身のこなし、しなをつくる。○正愁絶　絶は或る状態・感情の極点を表わす。雪がふるのは寒さの前ぶれだから、うれわしい限りである。ここはその言い方を反用し、雪がさかんに降るはげしさをいうのであろう。或いは、もうだめかとあきらめている時に、ちょうど(正)ふり出した意かも知れぬ。この四句について紀昀が「句々　恰も是れ小雪」と評したのを考えるべきである。　○風竹乱　風竹は風に吹かれてなびく竹。乱はその竹の枝が交錯するさま。この三字は客がおどり出したようすのたとえであるが、庭前で竹が風に吹かれているのをも同時に想像させる。
○老守　守は太守すなわち知事。蘇軾自身。○霜松折　これは酔っぱらったようすを松の折れたのにたとえた。
○翠袖　みどりのそで、とは美女をいう。たぶん妓女のこと。○点横斜　横斜は梅の形容に用いられることば。ここでは美女を梅花にたとえたのであろう。
宋初の詩人林逋(林和靖、九六七―一〇二八)の「山園小梅」の詩に「疎影　横斜　水　清く浅し」とある。点は、興を添えるものとして附け加えること。点景の点。○祇有　祇は只に同じ。○一韻到底の古詩であるが、段落を分つ。

窓べにそっと音がし、枯れ葉がさやさやと鳴りひびく。あれは竜神さまがまず手はじめの雪をふらせてくださるのだ。なかぞらに、くっきりと、けはいが集まったころ、まだ降るかどうかは疑われたが、身のこなしも軽々と斜に飛びかうとき、それは不安が高まったちょうどその時だった。客人たちがたちあがり舞うすがたは、風にみだれる竹のよう。老いた太守の私は、早くも酔いつぶれ、霜にうたれ折れふした松のありさま。ざんねんなのは、斜にさし出る梅が枝にたとえたい美女の袖はこの座になく、ただかすかな灯火がときおり消えんとしてはまたたきつつ照らすのが有るばかりである。

歸來尚喜更鼓永
晨起不待鈴索擊
未嫌長夜作衣稜
却怕初陽生眼纈
欲浮大白追餘賞
幸有回飈驚落屑
糢糊檜頂獨多時
歴亂瓦溝裁一瞥

帰来　尚お喜ぶ　更鼓の永きを
晨起して　鈴索の擊くを待たず
未だ嫌わず　長夜の衣稜を作せることを
却って怕る　初陽の眼纈を生ずることを
大白を浮べて　余賞を追わんと欲すれば
幸いに　回飈の落屑を驚かす有り
檜頂に糢糊たるは　独り多時なり
瓦溝に歴乱たるは　裁かに一瞥のみ

○更鼓永　更鼓は夜の時刻を知らせる太鼓。永とは太鼓の音が長く尾をひくこと。永の字を宋本では暗と書くが、解し難いから、「合注」に従う。○晨起　晨は早朝、日出のころ。○不待鈴索擊　この句の正確な意味は不明。擊はひっぱること(音セツ)。鈴索は鈴のついたひも。時刻を知らせるベル(陳邇冬の説)だとの解に従っておく。よび鈴が時刻を告げるのを待たず起き出たの意であろうか。○作衣稜　稜は棱の俗字、かどがあること。寒くて衣服がごわごわし、かどばっているさま(土屋弘説)。唐宋時代の士大夫は衣服に折り目があることを喜んだ(陳邇冬の説)。日本の王朝時代のこわ装束と同じである。○初陽　さしのぼったばかりの朝日。○生眼纈　纈は臘纈・交纈などの纈で、しぼり染め、くくり染めなどで、染め出したもよう。眼纈とは目の前に染物のような種々の色彩がちらつき、まぶしいこと。○浮大白　大白は大杯。浮はなみなみとつぐこと。○追余賞　余賞は尽きぬ興。前夜の雪見で充分に満足できなかったので、もう一度、雪見をしようとの意で追という。追は、去ってしまわぬうちに追っかける義。○回飈　つむじ風、旋風。○驚落屑　屑は木を鋸でひく時に出る削り屑。雪を玉のけずり屑にたとえて、玉屑・瓊屑などというのは詩の常套的表現である。わざと玉に関係のある字を用いることを避けて、ここでは落屑と言った。体物の語を用いない一例とすることができる。○糢糊　ぼんやりと見えるさま。色のあわいさま。薄雪の形容。○檜頂　ひのきのこずえ。檜はひのきの類。○歴乱　歴乱は乱雑なさま、まだらになっているさま。○瓦溝　屋根の瓦と瓦とのあいだの溝。みぞがわら。○裁一瞥　裁は纔と同じ。ほんのわずかに。一瞥はちらと見る、ごく短い時間。

居間に帰ったのは、うれしいことにまだ夜ふけの太鼓が長く尾をひくころだった。あくる朝は鈴のつなが引かれて鳴るのを待たず、起きて出た。冬の夜長に、上衣がかちかちに凍ったように折り目がかたいのも、気にはしない。ただ恐れるのは、朝日がのぼり、目もあやにまぶしいことである。大杯に酒をなみなみとたたえ、昨夜の興のなごりをつづけようとすると、つむじ風が起り、鋸の切り屑のような細かい雪をふり落した。びっくりしたが、しあわせでもあった。ひのきのこずえに、うっすらと見えるのだけは、長いあいだ残っていたが、瓦と瓦のみぞに、まだらをつくっていたのは、ほんのちらと見たばかりで早くも消えうせた。

汝南先賢有故事
醉翁詩話誰續説
當時號令君聽取
白戰不許持寸鐵

汝南の先賢　故事有り
醉翁の詩話　誰か続説せん
当時の号令を　君　聴取せよ
「白戦するに寸鉄を持するを許さず」と

○汝南先賢　汝南は潁州の古名。先賢は昔の賢者たち。「汝南先賢伝」という書物(魏の周斐の著)があって、「世説新語」の注などに引かれている。聚星堂に集まった賓客たちの賢才は、昔の「汝南先賢伝」にのせられた人々にたぐえるべきものだという意。○有故事　先例がある。○醉翁詩話　醉翁は欧陽修の別号。「詩話」はその著。この名の書物は、かれに始まり、その後、「××詩話」と称する書が続々出たから、区別するため、「六一詩話」とよばれる。六一居士も欧陽修の別号の一つである。○誰続説　欧陽修の詩論をつぐひとは誰か。特に、かれの「体物の語を禁じた」ことに重点があるであろう。この句は集まった人々への奨励とともに、自分こそ後継者だとの自負をも表わすのであろう。○聴取　取は動詞にそえて、しっかりつかむことを表わす。ここは命令。よく聞いておけ。○白戦　白打という場合の白と同じく、武器をもたない空手の戦闘の義と解せられて来た。宋本は百戦と書く。百戦は百回の戦闘の義。それでも意味は通ずるが、白戦の語はこの詩を出典として用いられているので、しばらく白の字のままで解しておく。○寸鉄　一寸ほどの刃物、武器。

この汝南の地の昔の賢者たち、そのためしは今も失われてはいない(ここに集まる英才を見るがよい)。醉翁と号した欧陽先生の「詩話」の精神を継承し発展させるのは誰か(きみたちではないか)。あのときの命令はどうだったか、よくよく聞きたまえ。素手で戦うのだ、一寸の刃物でさえ持っていてはならぬ。というのだったぞ。

「蘇軾〜中国詩人選」小川環樹より抄出